

## 二、午後の隠し事 佐々木百合子

七月を前に鬼瓦村では水泳の大会が行われる。それに合わせて選抜メンバーは放課後に残って練習ができる。

選抜メンバーは皆個別に水泳スクールに通っている子で構成されており、コーチは大城大学の院生が行うことが多い。

佐々木百合子もその一人で、午前の体育は見学で済ませ、放課後の練習に備えている。

「おい、佐々木、弛んでるぞ。見学でもしつかり顔を上げなさい」

「……」

ベンチで見学中、肌寒い風にうつらうつらしていると担任の岩村勝行がめざとく注意してくる。

体育の授業、普段からイヤらしい目を向けて来る彼に良い印象などあるはずもない。かといっていちいち突っかかれても鬱陶しいので前を見る。

レーンの端っ端では無意味に水しぶきを上げて遅々として進まない女子が居る。その向こうでは少し泳いでは立ち、また少し泳いでは立つのを繰り返す小太り男子。

その隣のレーンでは荒いフォームでゆっくり泳ぐ生徒達が居る。

そんなものを眺めていたところでなんの参考にもならない。ならばこそ、目をつぶって体力を温存していたい。

「……！」

そんな中、第一レーンではトビウオが如く泳ぐものがある。

鋭く水をかき分け、ぐいぐい先へと進んでいく。水しぶきも少なく、無駄が無い。それは泳ぎ切ると同時にターンで切り返し、そのまま往復する。

全生徒、いや、スイミングスクールの中でも群を抜いた実力の持ち主、新垣達郎だ。

「ふはあ！」

息継ぎ無しに50メートル泳ぎ切った彼は酸素を求めて大きく口を開けていた。

水をすいすい書き分け泳ぐ姿からは想像できない小柄な彼。ややずんぐりした身体付きなのはこれまでの練習のせいだろう。

達郎はプールを上がるとはたばたと見学所へと走り寄る。

「百合子さーん、どうでした。僕のフォーム！」

水温のせいで色白になる彼は満面の笑みでやって来る。

「達郎、プールサイドは走るなっつての」

また面倒なのがやってきたと、百合子は鼻をフンとならして視線を外す。

「ごめんなさい。でもぜひ百合子さんからアドバイスが欲しくって」

「あーもー、こっちくんよ。水、水。濡れるだろうが……」

水を滴らせてやって来る達郎に百合子は迷惑そうに眉を顰める。

「ああ、ごめんなさい。僕、気付かなかった」

体操着の百合子は濡れても困るとしっしと手で退ける仕草。達郎は今にもクウンと鼻を鳴らしそうな子犬の眼差しを向けていた。

「ったく、あたしは別にあんたのトレーナーじゃないっての。……まあ、ストロークが鋭くなったんじゃない？ 前より水しぶき抑えてたし」

「本当ですか！ やった。百合子さんに褒められちゃった」

「あたり障りのない感想を告げると達郎は大はしゃぎ。」

「あー、うっさい。もう、はしゃぐな鬱陶しい」

「だって、百合子さんが認めてくれたんだもん。嬉しいです」

ぱっと笑顔を返す達郎に百合子は照れた様子を隠そうと変に怒ったような顔になった。

「ほらほら、さっさと練習しときなさい。あとは先生にでも聞いて」

「先生より百合子さんの方が適格なアドバイスくれるし」

達郎の言うことは最もだろう。教員である勝行、真一、隆の三人はどれも水泳に詳しくない。勝行は常にプールサイドから文句を言うだけ。真一は補習組に付きっ切り。隆はぐるぐるプールサイドを見回りにしているだけだ。

唯一まともに指導ができるのは大城大学体育科卒の篠田信行。いつも大笑いしてばかりの彼だが、体育に関する知識は確かなもの。真一も指導方針をよく尋ねていた。

その信行も今日は修学旅行先の下見で不在。その為、授業での練習に意味は無かった。本来なら達郎も午後の練習に合わせて体力を温存しておくべきだが、まじめで頑固なところのある彼は馬鹿正直に参加していた。

あの小さい体のどこに午後の練習に耐える体力があるのか、たまに不思議に思う。

「はーあ……」

そしてさらに彼の方が水泳の実力が上ということ。

少し前までは達郎が後ろからやってきてどうすればこうすればと指導していたのだが、今はほぼ逆転。達郎は上から目線の師事こそしないけれど、タイムの伸び悩む百合子にアドバイスをしていた。

最初は躍起になって追い抜こうと思っ頑張っていたが、差は広がる一方。

小柄だが水泳向きな骨格なこと、頑固で努力好きということもあり、彼はどんどん実力を上げていった。

その一方で百合子はやや右上がり。

理由がわからず悩んでいたところ、達郎に少し強く当たってしまった。彼は俯きながら、理由を教えてくれた。彼の水着の前がとんがっていたことと、自分の身体付きが水泳に不向きになり始めたということだ。

その後は恥かしさもありません、ゲンコツをしておいた。

最近はどうしてもしょうがないことと割り切り、女らしさが磨かれているということあって誇らしくも思う。ただ、勝行の視線が鬱陶しさを増したことは面倒この上ないが……。

「僕、練習に戻りますね。百合子さん、午後は一緒に頑張りましょうね」

「あーはいはい、わかったから戻れっての……」

手のひらでハエでも追っ払うようにする百合子。達郎はそれでも笑顔で去って行く。

達郎は百合子が好き。それは学年で大半の人が知っている事実。当然スイミングスクールの子は全員知っている。当人も隠しておらず、好意を公言している。

チビの達郎とのっぼの百合子。

百合子は身体がいいけど性格きつめで男勝り。

達郎はチビだけど水泳だけは地域で一、二を争う天才スイマー。

試合前には女の子からがんばってと黄色い声援を受けて照れる姿も見せている。そんな彼から一途に求愛されるのは最初こそ鬱陶しいものだったが、たまに誇らしくもある。

多少の師事したこともあり、自分に認めてもらいたがゆえに頑張る彼を育てた自負もある。

自分が育てた男。そんな彼が全校集会で表彰されるのは隣で見ている嬉しく感じた。

悪くない。

そう思い始めるのも時間の問題だった。

「うふふ、達郎君、百合子の事大好きなんだね」

「……そうだね」

いちいち否定するのも面倒なので最近は肯定している……が、やや言葉に棘があるのは相手が相手だから。

「なんか羨ましいな。私もああいうこまこま動いてくれる奴隷みたいな子が欲しい」

「奴隷って……あんたねえ……」

唇の端が不自然な程にひかれた笑顔。きっと悪い妄想をしているに違いない。そんな顔をするのは中倉綾子だ。

一応は同じスイミングスクールに通っているが、さぼり気味かつ練習しない彼女は選抜から外れている。

綾子は表面こそ悔しがっているけれど、どうせ腹の中ではなんとも思っていないのだろう。もともと体育系に興味の無い彼女だ。せいぜい健康体操程度にしかみていない。

そういう態度は水泳を真面目に取り組んでいる百合子にとってムカツクこと。本来なら一対一で詰めておきたいのだが、どうもそれができない。やりにくいと感じていた。

どうも彼女はおかしい。

綾子とは彼女が転校してきた頃からの付き合いがある。最初は気の強い女子という感じで、男子と一緒にいってからかう悪友だった。けれど、ここ最近の級友からの態度、特に真奈やさっきの彼女に対する態度を見て考えが変わった。

真奈が昔イジメられていたことは知っていて、時折ノリが悪いのも知っている。そんな彼女が最近明らかに綾子を避けている。

クラスが違うこともあるけれど、それにしてもあからさま。

この前のバスケの時は休憩してくると言い、最期まで戻らなかった。上目づかいに相手の表情を見て愛想笑い。昔の陰気な下ばかり向いている真奈に戻っていた。

自分は綾子と良好な関係にある。これまではそう思っていたが、それは真奈も同じこと。しかし、綾子は真奈をターゲットにした。それは、今後の彼女との付き合い次第で、自分も被害に遭うかもしれない。

綾子は目立つ人が嫌いなのでは？

普段目立たない子が先生に褒められると、次の休み時間に聞こえる声で嫌味を言う。

クラスで頭の良い奈々や中川さつきはかっこのターゲットになる。

そんな中、自分は水泳で選抜された。

捻じ曲がったプライドを持つ彼女なら、自分に牙を剥くかもしれない。その時、自分が抗えるのか心配だった。

百合子はそんなことを考えながら、また走って来る達郎に頭を抱えていた……。

「ゆくり〜こさん！」

放課後、廊下をでるやいなや新垣達郎が、水筒と満面の笑みで待っていた。まるで室内犬が主人の帰りを待っていたかのようなはしゃぎっぷり。

「うわ、キモ！」

「キモって、僕そんなにきもいかな？」

選抜の練習が行われる頃になると毎日やって来る。

普段から気の強い百合子は男子を顎で使うことが多かったが、特に達郎は彼女のしもべのようにかいがいしく働き、他の男子に何か頼もうとすると「達郎に頼めよ」といわれるほどだ。

言うことを聞く小間使いが居ることに不満はないのだが、最近はまだで命令をさせられているような奇妙な錯覚に陥る。

「十分キモいっての……」

今日は財布と相談しての水筒持参。まるでストーカーじみてきた同級生に、百合子はたまに怖くなる。

「どうかしました？ 百合子さん」

「ん？ なんか達郎、ストーカーじみてきたなって思ってた……」

「はい、僕、百合さんと一緒に居たいですから！」

はつきりと宣言する彼に百合子は面くらう。

「馬鹿、そういうことはもっとう、大事な局面で……」

「百合さんと一緒にいるときは、いつも大事なんです」

恥しげも無く好意を伝えてくる背の低い同級生が、百合子も嫌いではなかった……。

着替えをしている百合子。クラスメート達はさっさと水着に着替え、どんどん教室を出て行く。彼女も遅れまいと、急ぐ。

しかし、ブラウスを脱ぐと、その下にまたもブラウスが現れる。脱いでも脱いでもブラウスを脱ぎきることができない。

大きさの変わらぬマトリョーシカのような錯覚に陥り、百合子はボタンを引きちぎる。パラパラっと零れるボタンと、白いブラジャーが現れた。

これでようやく着替えられると、百合子はバッグに手を伸ばす。

しかし、確かに入れたはずの水着が無い。

キャップもなく、水中眼鏡もなく、タオルだけがある。

『どうした？ 佐々木 』

そこへ担任の岩村勝行がやってくる。

『はい、実は水着を忘れてしまつて…… 』

今日は見学するしかない。せっかく得意な水泳の授業にも関わらず、百合子はがつくりとため息を着く。

『何言つてるんだ。おまえは選抜メンバーなんだからちゃんと練習しないとダメだ。今日は裸で参加しなさい 』

『は？ 』

勝行の言葉に百合子は驚愕する。普段から変態教師と陰口を叩いていたが、まさか真性のものだとは予想外だった。

『あの、意味がわかりません。裸なんて嫌です。あたし、見学しますから…… 』

百合子は相手にしていられないと、廊下に出る。

『待ちなさい。まだ話は終つてないぞ 』

裸でプールなどと言う馬鹿と話を通じるはずも無いと、百合子は気にせずプールへと向かう。今度職員室でこのことを話してしまったほうがよいかもわからない。

『こら、百合子！ 待て！ おい祐樹、アイツをひん剥け、裸にしろ 』

『え？ 』

勝行の怒鳴り声の後、どこからともなく祐樹が現れ、服に手を伸ばす。

『おい、やめろ！ 馬鹿！ 』

『しょうがないだろ、先生に言われたんだから…… 』

『ふざけるな、やっていいことと悪いことぐらい区別つけろ 』

こぶしを握り、思い切り殴る百合子。だが、手ごたえはなく、へらへら笑いながら手を伸ばしてくる。

ボタンの取れたブラウスに手が伸び、そのままびりびりと破かれていく。

『や、やめろよ！ 誰か、誰か助けて！』

『助けない』

すると背後から真奈の声がした。

『助けない』

さらにさつきがそう告げる。

『真奈？ さつき？ なに言ってるんだよ、この馬鹿達どうにかしてくれ！』

『だって、百合子だってあたしが困っていた時、助けてくれなかったでしょ？』

唇、いや顔中に粘液を塗りたくられたまま、真奈が見つめていた。

『なんのこと？ 知らないってば！』

『私がどんな目に遭ったのか、知らないでしょ？』

水着の一部をだけさせながらさつきの声。彼女は泣きはらした目で立っていた。

『だから、そんなこと……』

『嘘、気付いてるんでしょ？ あいつがあたし達……』

『今度は貴女の番よ……』

『へへ……』

いつの間にか短パンを脱いでいた佑樹は、勃起したオチンチンから我慢汁を垂らす。

追い詰められた百合子は、ブラウスを破かれ、ブラジャーをまくられ、ハーフパンツを  
ずり下ろされた。

『うふふ、みつともなくいい！ 百合子ってば、あんなにはしゃいで……』

遠くに聞こえる綾子の声。

『だめだぞ、百合子。お前は皆の期待の星なんだ。しっかり水泳するんだ。裸ぐらい恥  
ずかしがっている暇はないんだ』

遅れてやってくる勝行。彼も手をのばし、ズボンを脱がそうとしてくる。

『や、やめろ！ 離せ、離してよ！ 誰か助けて！ ねえ、達郎、助けてよ！』

そんな必死な叫び声も、迫り来る腕に遮られ、百合子はぐっと目を瞑るほかに抵抗する  
術もなかった……。

十

「百合子！ ねえ、百合子？ 起きてよ」

「ん〜……え？ え？」

ぼんやりしながら目を瞬かせる。するとそこには同じクラスの柳瀬愛が居た。目を覚ま  
したのを見ると彼女はほっとして今度は笑顔になる。

「んもう、百合子ったら寝坊助さん。早く水着に着替えたら？」

「え？ 水着？」

そういう愛も水着の上にパーカーを着ている。だが、周りを見ると私服姿で帰る準備を

している。

ぼんやりしながら思考を整えようとしばし呻く。

「えと、なんで水着なの？」

「何言ってるのよ。寝ぼけて〜。あたしは水泳の補習。百合子は選抜の練習でしょ？ 忘れたの？」

「え？ あ、ああ、そっか。そうだった……。あれ？ あたし、寝てた？」

「うん。さつき掃除が終わった後、席についてすぐ寝ちゃったよ？ 起こそうと思っただけど、練習があるからって先生に言われて起こさなかったの。でも、そろそろ練習だし」

「そ、そう。ありがと……」

「にしても百合子、なんか変な夢でも見てた？ うなされてたみたいけど」

「え……」

悪い夢と言うに十分な内容と、それを見られていたことで気まずさがやってくる。まさかと周囲を見るも彼女以外に気にしている様子はない。

ほっと一息つき、着替えのバッグを取る。

「あれ、どこ行くの？ 着替えなくていいの？」

「こんなところで着替えるわけじゃないでしょ。選抜メンバーにはちゃんと着替える場所用意されるんだってば」

「え、そうなの？ なんかずるーい」

「補習の子も一緒だってば。っていうか、あんたちゃんと読んでないでしょ」

「え〜、うそ〜、あ、本当だ！ あーん、損した〜」

言われてお知らせを読む愛は着替え場所についての指定があることに気付いていた。

のんびり屋で頭の足りない彼女らしい。ただ、それほど運動神経が悪いわけでもないのにどうして水泳の補習を受けるのだろうか疑問に思う。

「そういえばなんで補習受けるの？」

「んとね、この前プリント忘れたのと〜、宿題忘れたことの罰だって」

「ふーん」

やはり足りない。そう思った。

十

「……」

「どうかしました？ 百合子さん」

練習中、浮かない顔つきの百合子を覗き込む達郎。彼は心底百合子が好きらしく、彼女が暗い顔をしているだけで、それが伝播してしまうらしい。

「いや、なんでも……」

「でも、百合子さん、辛そうだし、今日はお休みしたほうが……」

お休みという言葉に悪夢が蘇る。

裸水泳などと愚かなこと。けれど、もし勝行がその気になったら、それに近いことをしてくるかもしれない。それほどまでに彼には信用が無い。

「いい、大丈夫」

そんな不安を払拭するためにも練習に勤しむ百合子だった。

\*\*\*

相模第二公園は広い。児童に遊具を開放するよりも、広い年代のレクリエーションとしての場所だ。

徹はその公園で後輩の篠原智樹とバドミントンの練習をしていた。

最初は秘密の特訓をするつもりだったが、真奈を誘って練習をしても物足りずに困っていた。そんな折、お使い途中の智樹がやってきてわけだ。

それからは日を見てバドミントンの汗を流していた。

「はあはあ……、やりますね。先輩……」

「そりゃ後輩に負けるわけにはいかんだろ」

ひさしのあるベンチで休憩をする徹と智樹。だんだん日が高くなり、汗が目にも染みて練習どころでないことすらある。

「うわ、汗びっしょり。しかも臭い」

ベンチで汗をだらだらたらす二人に、真奈が差し入れのペットボトル片手に声を掛ける。

「お、サンキュ」

「ありがとうございます」

二人はそれを手にするとごくごくとのみ始める。

「そんなに焦ると咽るよ？」

「大丈夫大丈夫……！ ぶはっ！」

言ってるそばから咽る徹に、二人は大笑い。

「だから言ったのに……」

「先輩格好悪いっす」

げほげほ咳をしながら、徹は渋い顔になっていた。

「さてと、そんじゃ今日はこのくらいにしておいてやるか」

「先輩こそ、俺、まだあと十ゲーム余裕っすよ？」

二人ともひさしの下でしゃがみ込み、ゼーは一言いながら項垂れていた。

休憩明け、妙にやる気になった智樹相手に徹も張り切って挑み、その結果、二人とも潰



れていたわけだ。

運動で汗びっしょりになり、さらに日差しに照らされさすがに音を上げた。

「うーん、暑い」

「そっすね」

夏も近づき徐々に気温も上がって来る。バドミントンならそれほど動かないだろうと思っていたのだが、本気でやれば細かい動きを素早く繰り返し返す必要がある。野球やサッカーのように試合最中でも多少なり緩急の緩をつけられるスポーツとは違い、常に動き続ける必要があることを忘れていた。

「なんかどっかで練習できるところないか？」

「バドミントンができるとなると、体育館ぐらいじゃないかしら？ 女子バレーの子達が放課後使ってるけど、コート隅っこなら使わせてくれるんじゃないかな？」

「体育館なら暑くないですね。さっすが真奈さん、頭良い」

智樹は顔を上げて真奈に声をかける。この前から感じていたが、妙にうきうきしていた。

「ん？ でも男子バレーもあるんじゃないのか？ 確か高尾だっけかが参加してたよ  
うな……」

「男子バレーなんてあるんすか？ 俺、聞いたことないっすよ」

鬼瓦村では子供が少ないものの野球、サッカー、バレーなど学外のスポーツ団が多い。中には近隣の相模大野や相模原の子達に混じって参加するクラブもある。

男子は基本、サッカー、野球を行い、女子はバレーボールに参加する。水泳は男女比率がそれほど変わらず、街の方へバスで移動していた。

バドミントンは残念ながら参加者が少なくスポーツ団が結成されていない。その為、練習ができるスペースなど無い。体育館を利用するにしても許可は出ないだろう。

「あるっちゃあるんだよ。でも、練習してるのは見たことない……」

男子バレー部は存在こそすれど参加者が少ない。その為、練習風景を見ることは皆無に等しい。そのせいか、バレー部女子が体育館の半分を使っているだけという印象があった。

「とにかく聞いてみたら？ 今日も練習してると思うし」

「ああ。そんじゃ行ってみるか。ええと、女子バレー部って誰が居たっけかな……、もしかして萩？」

「萩さんも居たんじゃない？」

三組のちびっこ女子の一人、萩千夏。彼女とは村内の「住所での班」で同じ班になっている。祭りの準備や登校時の引率など、徹は彼女と行うことが多かった。

チビのくせに徹をチビ扱いし、なにかと突っ込んでくる彼女は苦手。この前の三軒寺でのお泊まりでも当たりが厳しいと感じていた。

「千夏か。うーん」

彼女の事だから体育館の隅っこを使わせてと頼んだところで色々言われるのだろう。それに加えて女子バレーはそこそこ強い。練習もなまかなモノではない。許可してもらえ

るとは到底思えなかった。

「とにかく行ってみるか」

気は進まないものの、頼んでみないことには何も始まらないと荷物をまとめた……。

十

放課後の水泳の練習を終えた百合子は、近所の駄菓子屋のベンチで涼んでいた。

午前中は休んでいたものの、本気の練習のせいか倦怠感が募る。

「はあーあ……」

のんびり欠伸をする百合子の隣には達郎が控えており、何か用事がないかと顔色を伺っていた。

「おい、達郎」

「なあに！ 百合子さん！」

声を掛けると嬉しそうにやってくる達郎に、百合子はクリアファイルを渡す。

「暑いから扇いで」

「はい」

そんなワガママにも彼は嬉しそうに頷き、彼女にそよ風をプレゼントする。

「へー、達郎君って、百合子の奴隷なんだね……」

その様子をこっそり見ていたらしく、綾子が店の中から顔を出す。

「綾子、居たの？」

「ええ。野球の帰りなの。貴方達はスイミングスクールの帰り？」

そういう彼女はグローブと帽子を持っていた。

「野球なんてしてんだ」

村内野球クラブといえば鬼瓦アイアンズがある。女子の参加も可能であり、練習も本気の一軍、それに準ずる二軍、見学、野球に興味あり程度の三軍に別れている。

汚れの目立たない道具、恰好からして彼女は三軍だと予想できる。

スイミングスクールでもお客さんであり、野球もその調子。彼女は一体何がしたいのかわからない。きっと何をしてても本気になれない人間なのだろう。

「奴隷だなんて酷いなあ……。僕は百合子さんが好きだから……」

「まあ！ へえ、百合子って達郎君みたいなのが好きなんだ……」

「あたしは別に達郎のことを好きだなんて言っていないし。コイツが勝手にあたしを好きだけ。どうしてあたしがコイツを好きにならなきゃいけないんだよ」

おかしなことを吹聴しかねない綾子に、百合子は機先を制す。

「あら、違うの？ 嫌いなんだ」

「百合子さん……」

そして、遠まわしに嫌いと言われた気になりショックを受ける達郎。

「いや、だから、その。綾子がおかしな言い方するから……」

「だって、普通そんなこと、仲の悪い子、んーん、嫌いな子にさせたりしないでしょ？好きだから頼むんじゃないの？」

「ん？ んーんと、それってどういう意味？」

「だから、嫌いな子にわざわざ扇いでなんて頼める？ 変に期待持たせて、ストーカーみたいになるかもよ？」

「それだったら今も十分そうだよな？」

「えへへ……」

褒められていないどころか、かなり不名誉な意識のされ方にも関わらず、達郎は頭を掻く。

「へえ、じゃあ、百合子は達郎君のことをストーカーみたいに思ってるんだ」

「なんだよ、さっきから……。いい加減怒るよ？」

「ま、こわーい！」

わざとらしく顔を手で隠す綾子。

百合子にしてみれば、彼女が噛み付いてくることのほうがよっぽど怖いが……。

十

帰路に着いた百合子は不機嫌そうに早足で歩く。達郎もそれを後から着いていく。彼としては何か気に障ることがあったのかと、気が気でない。

そんな彼の心情など余所に百合子は確信していた。

綾子は次のターゲットに自分を選んだ。水泳のことや達郎とのこと。どれが彼女の癪に障ったのかはわからないが、これからは彼女との付き合い方を全面的に見直す必要がある。

あと半年近く、彼女とは距離を置こう。受験ができるほど賢くないが、選抜次第では、隣の山陽のスポーツ推薦に通るかもしれない。

そうすれば彼女と縁が切れる。それまでの数年、絶対に逃げ切ってみせる。

百合子は大まかに考えていた。

家の近くまで来てもまだ達郎が着いてくる。彼は公言している通り百合子のストーカーなので、いつも一緒が良いのだろう。

達郎曰く、「百合子さんが心配だから」らしいが、まだ幼さの残る達郎のほう

がずっと心配なのが世間の認識だった。

「なあ、達郎はさ、山陽受験したりする？」

「え？ 僕ですか……。どうだろう。百合子さんは受験しますか？」

「もし、そうだったら……」

「百合子さんが行くなら僕も行きたいです」

匂わせる程度の言い方だが、達郎は彼女についていくつもり満々で、恥ずかしげもなく

そう応える。

「じゃあさ、もし、今回の選抜で結果だせたりするじゃん？ そうしたら山陽行くかも。ほら、あそこって運動できれば馬鹿でもいんでしょ？ あたし、馬鹿だから……」

「百合子さんは馬鹿なんかじゃないです！」

「いんだよ、あたしだってわかってるし……。いやさ、ほら、お前はそこそ賢いじゃん？ だから、やっぱ嫌かなって思ってた……」

「いえ、僕は百合子さんと離ればなれになることのほうが嫌です。それに、勉強ならどこでもできますよ。それに山陽から湘國に行った人も居ますし」

「スポーツ推薦だろ？ まあ、でも……ふふ、お前もバカだな」

百合子はそっと彼の頭を抱き寄せる。

プールの塩素がしっかり洗い流されていないせいで、薬品のつんとした臭いがする彼。それは自分も同じだろう。

「百合子さん？」

面倒でブラをしていない百合子と、シャツ一枚で触れ合う達郎。彼のおでこが、彼女の胸の谷間にうずまっており、成長途中である男の彼も、その柔らかさに股間が熱くなっていた。

「ほんとお前ってバカだな……。あたしなんかそんなにさ……。ま、嬉しいよ。そういうの……」

「はい」

「もしさ」

「はい？」

「もし、あたしがなんか辛いことがあったとき、お前は助けてくれる？」

「はい！ 当然です」

「頼りにしてるよ。がんばろうな」

「はい……」

百合子の声に、達郎は不思議に思いつつ、頷いた……。

十

達郎に別れを告げる時、今日はむしろ百合子のほうが別れを惜しんでおり、何か話の種がないかと悩んでいた。

達郎もそれに根気良く付き合っていたが、百合子の母の呼ぶ声にそれも中断。

百合子は気の利かない母に悪態をつきながら、夕食をがっちり取るとバタバタと部屋へ戻った。

十

姉の後のお風呂を取り、窓を開け放してベッドにごろり。蚊取線香を漂わせながら、百合子はぼんやりと窓の外を見ていた。

達郎の幼い顔を思い出し、ふっと笑う。彼に頼るとなると、よっぽど追い詰められているのだろう。まだ、そうなるかと決まったわけではないのに……。

——アイツももう少し背が大きければなあ……。

不満その一である身長。自分の胸元くらいしかない彼も、来年あたりからは大きくなるのだろうか？ 水泳を続けるにしても、身長は武器になる。

——それにもうちよつとこつ、がつつとこつあつてもいいのに……。

不満その二である物腰の弱さ。小間使いのようにかいかいしく働いてくれるのは便利だが、ドラマに見る恋人をぐいぐい引っ張ってくれる力強さに惹かれるところがある。

それは彼を恋人候補と考えればの不満。百合子の中にもそういう気持ちがあるかもしれないと思うと、それは意外だった。

——あたしは何を考えてるんだ？

だんだんと浮ついた思考に漂い始めることに顔が熱くなる百合子。初夏を思わせるじめつとした暑さにも関わらず、枕をぐつと抱きしめてじたばた身を振る。

——アイツはあたしのこと、好きなんだよね……。あたしは別に、アイツじゃなくてもいいし……。

勉強は彼のほうが上。運動なら水泳以外自分が上。頑固なところはあるけれど一途。だから総合的に高評価。

——あたし、本当はアイツのこと……。

ぼやける彼の顔。身体が熱くなるのは、枕を抱きしめているからというよりも、それを見立てているから。

大胆にも抱きしめた。彼は自分の胸元におさまり、慌てた様子でふうふう喘いでいた。

嫌われたくないという気持ちと、想いの人と触れ合えた喜びにせめぎ合う達郎。汗に混じって夏野菜のような青臭さを感じられる彼に、饅えた欲望はない。

どこか生ゴミのような青臭さを撒き散らす男子と同質であると、百合子はどうにも納得できなかった。

——アイツもやっぱりエッチなことしたいのかな？

胸を弄る百合子。真奈のそれと比べて小さいけれど、クラスの中では一番だろう。

男ならだれでも大きいほうが好き。続いて柔らかさと感度が来る。

この前読んだファッション誌にはそうあった。

無言で自分のそれを揉み始める百合子。柔らかいには柔らかいが、日々の運動のせいとか、やや筋肉の厚みがあり、固い気がする。

プールの着替えの時、ふざけて愛のそれを揉んだことがあった。手におさまるサイズのものに、柔らかくてとても心地よいのが印象にある。

対して自分のそれはそれほどでもない。もしかしたら、男に好かれにくいかもしれない。

——やっぱりお前も柔らかいほうが好きなの？

もにゅもにゅと揉み始める百合子。想像の達郎は 「そんなことありません、百合子さんのおっぱいなら僕は大好きです。」 と恥ずかしそうに応えてくる。

——ばーか、誰があんたなんかにおっぱい触らせるかよ……。

——そんな、酷いです。僕、百合子さんのおっぱい……。

——お前、あたしのおっぱいが好きなの？

——おっぱい、好きです……。

——おっぱいだけ好き？

——違います。百合子さんが好きなんです！

想像上の同級生をイジめる百合子。彼は今、瞼の裏で 「百合子さんのことが好き」と鼻水をすすっている。

——じゃあしようがない。触らせてやる。

——本当ですか？

嬉しそうに顔を上げて、百合子が何かイジワルな条件を出そうとするのも待たず、彼はおっぱい目掛けてひつついてくる。

——こら、やめる。離せ！

——ん、いやです！ せっかく百合子さんの赦しが出たんだ。僕、ぜったい離さない！ 両胸を両手で掴む達郎。彼の股間はびくんびくんと勃起したソレが鎌首を上下に揺らし、だからだとはしたくない汗を垂らしていた。

——こら、変なもん垂らすな！ この変態！

——だって、僕、百合子さん見てたら我慢できなくて！

——何が我慢できないだ。もしかしてお前、あたしと一緒に居るときはいつも？

——はい、オチンチン大きくなって困るんです。これも全部百合子さんのせいです。責任とってください！

——責任って、どうやって？

——その、抜いて……。欲しいです。

想像上の彼は百合子にがつつくが、本当の彼なら理性と煩惱のせめぎ遣いで、嫌われたくないからと、求めないかもしれない。

——いんだよ。ソレぐらい……。

百合子は机にあったお菓子の筒の空箱を握り、股の間に近づける。

——達郎の固いな。こんなにガチガチなんだ。

——だって、百合子さんのおっぱいが大きいから、つい……。

——つついてなんだよ、つついて……。お前もやっぱり男だな。こんなガチガチにしてさ、あたしに握られて気持ちいいんだろ？

——はい、すっこく……。

——これ抜くと先っぽから何が出るんだ？

——えと、えと……。

——ぶー時間切れ。残念ながら、これ以上は抜きませ〜ん。

——そ、そんな……。

——うふふ、本当は抜かれるより、ここに入れたいんだろ？

百合子は空箱を股間に挟み、ショーツへと近づける。

——あ、ああ、そんな、まずいです。百合子さん……。

——何が？ あんた、勃起ってこうするためになるんだろ？

——だって、だって……。

——スケベ……。本当はしたいくせに、さつきからびちよびちよ我慢汁たらしでさ……。

この変態。

——ご、ごめんなさい……。僕、百合子さん……、えっち……えっちしたいから、勃起してて……。でも、でも、ごめんなさい……。

——ふふ、正直でよろしい……。それじゃあせつかくだから、アソコとアソコでチューしちゃおっか……。

——え！？

——セックスはダメ。だけど、チューぐらいいいじゃん？ アンタのくっさいオチンチンとあたしのここでチューってさ……。

——は、はい……。

——あーやらしい、このスケベ、チューするっただけで、こんなに我慢汁垂らして……。

本当にスケベ……。

——百合子さんとチュー。百合子さんのアソコと僕のオチンチン……。

——何？ どうしたの？ うわ、マジで？

——あ、もう、だめ……。僕……。あつ、ああ、あ、あ……。

妄想の中の達郎はびくびくっと震えると、彼女の割れ目目掛けて精を放つ。熱くぬるっとしたものを想像しながら、百合子は自身の割れ目に唾液で濡らした指先を這わせ、軽い快感を感じる。

「ん……んっ、んう……はあ……はあ……はあ……はあ……」

数秒の快樂の後、百合子は彼に見立てたお菓子の箱にキスをして、机に戻す。

色のはげた箇所のある筒は、ところどころ皺があり、何度も握られていた……。

「あたしってば何惨めなことしてんだろ……。でも、これも全部達郎がひ弱だからいけないんだ。もっとアイツが積極的なら、もうヴァージン卒業くらい……。アイツには無理かな……。でも、もし今度の大会、格好いいところ見せてくれたら、その時はあたしから襲っちゃおっかな……。そうしたらあいつも男子として自覚もって少しは格好よくなるかもしれないし……。」

表彰台でカップを掲げる達郎と、互いに栄光を称えあう自分の姿。

その翌日には彼と二人きり、クーラーの効いた寒いくらいの部屋で、温め合うのもいいかもしれない。

ファッション誌にある初体験年齢は、彼女の年代でも十数パーセント存在しているらしいから……。

十

夕暮れ時、プールが閉まった後、更衣室を施錠するのは監視の役目だ。

監視員は鍵を手に職員室へと向かい、当直である岩村勝行に鍵を渡す。

勝行はそれを受け取り、ご苦労様と労い、廊下まで見送り、姿が見えなくなったところで鍵をポケットにしまった。

夏休み中の更衣室は一階にある木工室が当てられる。

イーゼルなど大きめな道具は準備室に撤去されているが、版面など壁に掛けられた物はそのまま飾られている。

そのうちの一つ、風景画がある。去年の卒業制作だ。

それが不自然に厚みをもっているのは、掃除の時間に誰かが落して割れたから。それを直したのが彼自身。多少の細工をしたことは誰も知らない。

勝行は壁際に椅子を重ねてその上へ乗り、版面板を持ち上げ、とっかかりから外す。額縁の裏を強く押し、絵の部分を外し、そこから小型のカメラを取り出し、にやりと笑う。

十

更衣室を出てすぐのトイレへと駆け込んだ勝行は、小型カメラからマイクロSDを取り出し、ハンディカメラに差し替える。

待つこと数秒、機械音と共に画面が光る。

無人の更衣室が映し出され、数秒後、物音と共にドアが開く。

補習と選抜メンバーの女子が数名顔を出し、ぺちやくちやおしゃべりをしながら着替えを始める。

女子だけという開放感からか、隠す素振りもなく、育ち始めた身体を惜しげもなく晒していた。

「うほお……」

まだ乳房のふくらみも見せない女子に混ざり、佐々木百合子が着替えを始める。

早熟な果実を二つほど胸に抱える彼女は、他の女子からの羨望の眼差しを受け、カメラ越しに欲情を向けられていた。

「処女のクセにでけえおっぱいしゃがって……。もみてえ！ ぺろぺろしてえ！」  
低俗な言葉で興奮を煽りながら、勝行はベルトを外す。



期待と興奮からがちがちになっていた陰茎を握り締め、百合子のおっぱいをズームインしながら上下に扱く。

「くそ、くそ、こんなでかいぱいおつなんだ！ 興奮するじゃねえか！ お前が悪いんだぞ。先生のことをこんなになるまで挑発しやがって、バツとしてお前のおっぱいは俺のオナペットだ！ おら、もっと見せやがれ！」

好き勝手に喚く勝行だが、角度のせいでそれほど彼女は写らず、着替えを終えた女子によって遮られてしまう。

「う、まだなのに……ちきしょ……」

快楽の予兆を感じた勝行だが、射精までは至らない。巻き戻そうかとも思ったが、その矢先、廊下を走る音がしたので止める。

勝行は服を正すと、周囲を伺いながらトイレを出る。そして誰もいないことを確認し、急いで女子更衣室に戻る。

再びカメラの設置を終えた勝行は、何食わぬ顔で職員室へと戻った……。



近隣地域での水泳大会当日、選抜メンバー達が校庭に集まる。規模としては県大会の前哨戦という位置づけだが、対外試合ということもあり、十分気合が入っている。

鬼瓦校は制服が無いが、対外試合ではレンタルの制服がある。男子はワイシャツにレンタルのハーフパンツ、女子はブラウスに紺色のレンタルのプリーツスカートを着用する決まりだ。

バスを待つ間、教頭からの訓示を受けていた。ひらたく言えば鬼瓦校の代表としてがんばって欲しいという内容。それを十数分長々と話してくれていた。

その後、冷房の効いたバスの中では皆、教頭の悪口で盛り上がっていた。

試合会場に向かうバスの中、百合子はお守りをぎゅっと握っていた。

「百合子さん、大丈夫です。僕がついてますから……」

勝気な彼女の珍しいナイーブな一面に、隣に座っていた達郎が胸を張って言う。胸板程度の頼りがいもないだろう彼に、百合子はツンとおでこを弾く。

「何が、僕がついてますだよ。お前がだっさい結果にならないように祈ってやってんの。ほら、このお守りやるから持ってる」

「え？ くれるんですか！ わーい、百合子さんからプレゼントもらっちゃった！ 絶対大切にしますね！」

達郎は単純に喜び、しげしげとお守りを見つめる。

そこには必勝祈願とあり、中に何かはいっているのか、もこもこしていた。

「何入ってるんだろ……」

達郎は結び目を開こうとするので、

「勝つまで開かない」

百合子は慌てて彼の手を取り止めさせる。

「はい、ごめんなさい」

言われてみればもっともな意見に、達郎はしゅんとなる。ただ、怒りながらもじっと手を握る彼女に、この前感じた甘酸っぱさを思い出させられて……。

——今日の結果次第でアタシはどうするのか？

——いや、もう引き返せない。

——二重の意味のお守りを渡したし。

——いくらバカでも意味に気付くよな。

——まだ早いのは重々承知。

——けど、その意思を伝えたい。

——達郎。

——あたしも不安なんだ。

——あと、アンタのこと嫌いじゃないよ。

——結構好きだし、もし、あげるならあんたで我慢してあげる。

——代わりにアンタのもアタシがもらってあげるから。

——だから、お願い！ 精一杯がんばるから！ カッコイイ達郎になって！

十

空砲を合図に二者に飛び込む選手達。

小柄な達郎は飛び込みで差をつけられるが、せいぜい十数センチ。鋭い泳ぎとターンで折り返しを前に先頭に踊り出る。

そのままトップを守り、追いつかれることもなく、一着でゴールイン。

時間にして五分とかならないはずなのに、フラッグが上がるまで、百合子は一時間にも感じられた。

周りにはしゃぎ出したのを見てようやく結果を知り、ほっと息を着く。

もともと才能のあった彼が、愛しい百合子からのお守りを受けたのだ。

実力以上の結果が出たとして、それほど不思議ではない。

達郎は差し出されたタオルも受け取らず、出番を待つ百合子に向かって手を振る。

さすがに恥ずかしくなった彼女は下を向いていたが……。

十

男子の部、五十メートル、クロール、一位、新垣達郎。

達郎を称える拍手と盾の授与。彼は真面目な顔つきでそれを受け取り、深々とお辞儀をしていた。

表彰台に上がったのは全部で四人。入賞を果たしたものが八人で、まずまずの結果となった。

その中でも新記録を出しての勝利を飾った達郎は特に称えられ、帰りのバスの中で盾と一緒に何度も写真をせがまれていた。

「まったく、調子に乗って……」

ちやほやされる達郎に、百合子は三位のメダルを眺めつつ、ぼやいていた。

それとは別に引き返せない約束に、だんだんと気持ちが高鳴っていくのがわかった。

十

校長への報告は年長ということもあって達郎が行うこととなり、彼を残して解散となる。賞状の授与は来月始めの全校集会で改めてとなる。

次は夏休み前の県大会の予選、そして夏の終わりに県大会。ゆくゆくは年の瀬の全国大会が待っている。

これまでは県大会止まりだったが、達郎なら全国へ行けるのかもしれない。そんな期待が彼の小さな肩にかかる。

他の選抜メンバーは達郎に今後もガンバレ、目標にしていると激励した後、先に帰路に着いた。

百合子も一旦彼らと一緒に帰路についたが、忘れ物をしたといい、学校へと引き返す。彼女にとって大切な忘れ物。達郎とのプレゼント交換があるから……。

十

校長室にて盾と結果を報告する達郎。ズボンの後ろポケットには、百合子からもらったお守りをしのぼせており、着席を求められたとき、そととずらした。

退屈な話に当たり障りのない受け答えをしながら、達郎はしきりに時間を気にしていた。もう帰ったであろう百合子に思いを馳せる彼。今日みたいな特別な日は、少しぐらい大胆になってもいいはず。

自分は今日の試合のヒーローなのだ。彼女だっていくらか自分を見返してくれる。そんな淡い期待を持ちながら、達郎は早く話が終らないかとやきもきしていた。

十

百合子は宿直室に居た。

職員専用の入り口から入ろうとしたとき、勝行に止められたのだ。

用もないのに校内をうろついてはいけない。今日はプールも締まっているし、試合の後で疲れているだろう。だから帰りなさい。

もっともな理由を付けられたとき、素直に帰ればよかったと後悔した。

彼女は思わず達郎を探していると行ってしまい、「それなら先生が呼んできてあげるから待ってなさい」と言われたのだ。

その待合場所に宿直室を指定されたのだった。

百合子は出されたジュースを飲みながら、週刊誌を手取る。

それほど興味を惹くものがあるわけでもないが、暇つぶしはそれしかない、仕方なし

にばらばら捲る。

芸能人の与太話に政界についての胡散臭い話。そんな中、目を惹いたのが、ヌード関連のページ。ご丁寧にカッターで切られている袋とじは、ページの隅っこがふやけている。

——うわ、キモ……。

愛読者に嫌悪感を示し、百合子はそれを放り投げた。

男の自慰行為については雑誌の記事程度に知っている。自分の勃起したものを扱き、はあはあと喘ぐ男は醜悪そのもの。きつと勝行もあのページを見てしていると思うと、敵は綾子だけに非ずと認識を改めてしまう。

そうでなくとも彼の視線が自分の胸元に集まっているのが痛いのだから。

そう思うと、ジュースを飲んだことすら気持ち悪くなってくるから不思議だ。

まだ来ない。

試合の緊張と疲労がだんだんと瞼を重くさせ、そっと吹いた風を最後に、意識が途絶えた……。

物音を聞きつけた男は戸を開き、ようやく眠ったことに安堵する。例のカメラを手に、宿直室から生徒を連れ出した……。

十

視聴覚室に敷かれた使い古しのマット。そこに寝かせられる女子。見下ろす男。

ジュースに仕込ませた睡眠薬。即効性のある物ではないが、効果は抜群だ。以前も給食に混ぜたところ、十分な効果があった。

今回は疲れのせいもあり、眠りも深い。先ほどからほつたを突いても、彼女は起きる気配がなかった。

勝行は彼女の胸元に鼻を近づけ、ふんふんと嗅ぐ。

日焼けした首筋には玉のような汗が浮き、ツンとした臭いを放つ。

「はは、臭いもツンデレか……、困った子だな。百合子は……。」

汗を指ですくい、べろりと舐める。しょっぱい味と臭いに眩暈を覚え、さらに鼻息が荒くなる。

紺色のプリーツスカートを捲り、盗撮で何度かお世話になったパンティを見る。

「佐々木、パンティは無地の白って校則で決まってるんだぞく、こういうパンティは没収だ！ 校則だからしかたないんだぞ！」

肌に食い込むパンティの紐をずりおろし、日焼けしていない白い肌をあらわにさせる。

「なんだ、佐々木のアソコはまだ薄いなあ……。割れ目が見えてるぞ？」

薄い草むらを鼻で笑おうとする勝行だが、興奮で膨張した血管のせいで鼻がつまる。

指定のスクール水着では覆われているはずなのに、白い部分が少ないことに気付く。

細い線とアソコを守る三角形。それは授業で使う三角定規よりは大きい程度のもので、

ブラウスを捲ったところ、お臍周りまでしっかりと日に焼けていた。

勝行は、ぐくり唾を呑み、百合子の両足を持ち上げる。

たふんと柔らかな尻肉は指が沈み込むほど柔らかく、トランクスの中で先っぽがジュンとする。

お尻も同じくきわどい部分以外は日焼けしており、彼女が着けていたであろう水着の布地率が伺え知れる。

「佐々木、感心しないなあ……、こんなところまで日焼けするような水着着て……」  
意識のないのを確認しながら、百合子をうつ伏せにさせ、お尻を持ち上げさせるよう、膝を着かせる。

「ほら、こんなに日焼けして、ひりひりして痛いんだろ？ どうだ？ どうだ？」

お尻の柔らかな肉を両手でもみほぐし、色素の濃くなっているお尻の穴をひくひくさせる。そこから漏れるツンとした臭いに、勝行は鼻をひくつかせ、だんだんとのめり込むように前に出る。

「しょうがないな、先生が舐めてあげよう。特別だぞ。百合子の、佐々木百合子の汚いお尻の穴を舐めてあげるんだぞ！」

普段、自分をゴミのように見る生意気な生徒の恥ずかしい穴を侮辱し、醜悪な行為を宣言することで陵辱の気分を高める勝行。

溢れてくる唾液をいっぱい溜めた舌で、べろんとお尻の割れ目をなぞり、ひくつくお尻の穴ごと舐める。

「んはあ、べろべろ、ちゅば、べろ、ちゅ、べろべろ……んふう……」

ひとたび舐めだすと、侮辱や陵辱の意識など吹っ飛び、欲望のまま、舌が回る。

「べちよべちよ、ちゅばちゅば……べろん……ちゅちゅ！ ちゅちゅ！」

肛門へのキスを繰り返し、皺を伸ばすようにお尻を揉み、たまに指で穴を突く。

「んっ……」

甘い声をして一瞬固まる勝行。しかし、まだ意識は深く落ちていくらしく、起きる気配はない。

再びお尻の穴を突き、唾液に滑らせ、第一関節まで入れる。

「んう……んう……」

その感覚はあるのか、百合子の口から苦悶の声が漏れる。

「百合子、先生はがっかりだ。まさかお尻の穴を弄られて感じちやうような変態だったなんて……」

勝行は指を抜くと、彼女を仰向けに戻し、しみじみと呟く。

「先生は百合子に正しい道に戻って欲しい。だから、今から正しいセックスをしようと思う。これは百合子のためなんだ。勉強なんだ……」

ベルトを外し、トランクスを捲ると、先っぽから我慢汁を垂らした逸物が顔を出し、百合子のまだ男を知らない割れ目に入りたそうに首を上下に揺らしていた。

「いいか、これは勉強だ。百合子のための……」

十

まだ男を知らない割れ目が太い野暮な指でぱっくり開かれる。

百合子の陰唇は自慰の形跡もなく、痛々しいピンク。

「佐々木はオナニーしてないんだな、先生、感心したぞ。お前みたいなエロイ身体ならオナニーしまくりどころか、セックスしまくりだと思ってたけどなあ……」

陰唇を開き、指で突く。まだ濡れていない膣口のせいで摩擦が強く、入りそうにない。勝行は指を舐め、唾液で滑らせ、奥へと指を入れ込む。

「んう……ん……」

呻く程度では彼も動じなくなっており、膣口付近をこねくりまわすように動かします。

「ん、全然濡れないな……」

指先をベチャベチャ舐めることにまどろこっしさを感じた勝行は、彼女の割れ目にぶちゅつと唇を押し付け、舌先でそれをなぞる。

「んちゅ、べろべろ……ちゅう、ちゅば……べろべろ……べろ……」

汗とおしっこのおしよっぱさを舐め取り、代わりに唾液を押し込む。

だんだんと生徒を侵蝕していく実感が沸き始め、ぎちぎちになった先っぽからは、どろりと大量の我慢汁が溢れる。

「うへえ、まじでエロイな、こいつ……。どうせ来年にはやりまくるんだし、一度ぐらい美味しい思いしてもいいよな……」

彼女の顔を跨ると、その赤い唇に黒光りした亀頭を押し当て、くにゅくにゅと扱かせる。

「くそ、やっぱフェラさせないとつまらん……」

とはいえ、もし彼女に意識があったとしたら嘔み付かれかねない。

前に掃除の件で彼女を叱ったとき、その唇はつまらなそうに舌打ちをしていたのを覚えている。その唇が今、我慢汁でぬらぬらと光り、イイカンジに勝行の亀頭を刺激していたことに、暗い満足感を覚えていた……。

勝行は百合子の顔を拭う。前髪に絡みつく半透明のねばっこい液体を丹念に拭き、ついで口元を濡れタオルで拭く。

数十秒の唇への悪戯でどくどくと我慢汁が出てしまう。そろそろ暴発しそうな陰茎の我慢のなさに悪態をつきつつ、汁塗れの顔の写真は保存済み。

ついでにおっぱいと陰部のアップを撮影したあと、射精欲求に冷静さを失い始めていた。

「くそ、コイツのくそ生意気マンコをぶち破ってやりたいのに……」

それを断念せざるを得ないのは薬の効果時間。即効性だけれど持続性が無い。無理に行為を行えば達することはできても身の破滅しかない。

膣を触ったときにかすかに感じた処女膜を思い出す。もうこんなチャンスは訪れないだ



ろうという思いが渦巻く。

悪あがきとばかりに勝行は百合子に覆いかぶさり、チンポをパンティ越しにマンコに押し当てる。

「んう……」

圧迫感からか百合子は呻く。目が覚めるのも時間の問題と、勝行は床オナの要領で彼女にチンポを擦りつけ始めた。

「んう、くう……はあはあ……」

おっぱいを揉み抜き、乳首を舐める。大きくて張りの良い乳房の弾力は楽しく、汗ばみ始めて彼女の香りがする。乳首もぶくっと立っており、それを唇でつまみ舐める。

「んっ……ああん……」

寝ているはずの彼女だが、身体は反応するらしく甘い声を漏らしていた。

「なんだ、先生に舐められて嬉しいのか？ このスケベが。本当は処女捨てたいんだろ？ 先生がいつでももらってやるからな」

そう言う唇をちゅうっと吸う。柔らかい唇は自分の汁で汚れていたが、百合子の唇に唇で触れたことの方が重要。

散々口うるさく言われた口にキスをしてやった。

ファーストキスは誰か知らないが、毛虫のように嫌う自分にされたことはさぞ屈辱であろう。そして、思っていた以上に柔らかく、弾力に富む唇に酔いしれる。



「むちゅ、ちゅ、あむ……ちゅうずるずる……」

舌をねじ込み触れ合い、唾液を注ぐ。百合子の口腔内を汚していくことに興奮し、目の前が明滅する錯覚を抱く。

顔はきつめながら美人。スタイルも良い。性格だけが悪い女。こうやって寝ていれば最高のオナペットだと感じる。そうそう薬を盛れるはずもなく、使い切りなのが惜しい。

チンポをぐりぐりと割れ目にあてがい、淫らな汁をパンティに染みこませていく。

ぬちゅぬちゅと音がして、周囲に淫らな香りが漂い出す。

「んう……んっ……」

寝ているも割れ目を弄られると感じてしまうらしい。既に身体は出来上がっていることもあり、その反応は自然なもの。

マグロのまま横たわるだけかと思っていたが、鼻を鳴らす百合子を見てさらにチンポが力強くなる。同時に我慢汁をどろっと垂らしていた。

「くう、百合子、いいからだしてんな……。このままねじ込んで女にしてやりたいぞ。

先生のチンポでなあ……！」

身体をねじりぐいぐいと擦りつける。

ねちよねちよと音を立てる接合部。パンティは既にべとべとで泡すら見えた。



「ううん……」

眠る百合子の口が開く。赤い舌がちらりと見え、涎が糸を引く。

「……」

まだチンポはでかいまま。あと少しで快感を得られる状態に張りつめている。

開いた口は大きく、舌も唾液でぬるぬるしている。チンポの先は我慢汁が溜まっており、滑らかさには余裕がある。

「くくく……」

勝行はチンポを彼女の口にあてがい、腕立て伏せの恰好でぐいっと押し込む。

「んぐう……」

苦しそうに呻く百合子。舌がぬじゅりと動き、勝行のチンポ、竿をなぞる。

「うう……」

温かい感触と滑らかな感触。圧迫感も薄く、風俗で啜えさせても嫌な顔で手抜きされたのと同じ感覚。

それでも生意気な教え子の口をチンポで塞ぐことの方が精神的充実感が得られた。

「はは、どうだ、佐々木、先生のチンポは美味しいか？」

舌先はかすかだが動き、チンポをくすぐって来る。ゆっくりと身体を落とし、喉の奥までねじ込むときゅつと締めまり、触れ合える場所が多く刺激も強くなる。

「はあはあ……くう……やばいな……。佐々木のフェラ、すごいぞ。先生、すぐにでもいっちゃいそうだ……」

卑猥な悪戯で興奮していた彼は薄い刺激でも十分に爆発寸前に追いやられている。

時間もないことから腕立て伏せのピッチを速める。

ぬちゅ……ぬちゅ……ぬちゅ……ぬちゅ……ぬちゅ……

んぶ、ぬぶ、ぬぶ……ぬちゅ……

胸を揉み、手にチンポを握らせてみたり、啜えさせたり……。抵抗の出来ない百合子の前に欲望の限りを尽くす勝行。

卑猥な水音を立て、時折口から外れて涎のようにだらつと垂れ、塗りたいくらいにいく。

「はあはあはあ……百合子、百合子、先生のチンポおいしいだろ……なあ、もっと美味しいミルクでるんだぞ？」

股間あたりがきゅつと締めまり、びゅつと我慢汁を出す。それが喉に絡まったのか、彼女はげほつと咽ぶ。反射的に口を閉じたらしく、チンポがぱくつと啜えてしまう。

「うっ！」

不意をつかれた形でチンポを啜えられる。このままでは出してしまう。なんとか我慢し、引き抜くとちゅぽんと音がした。

「んぐ、んぶぶう……んぶ……」

喉がごくりとなる。百合子は今、無意識のうちに我慢汁を嚥下したのだろうか？

唇とチンポを繋ぐ糸は粘っこい。このままぶっかけてやりたいけれど、拭うことが困難と理性が止める。

「……………」

このままフェラをさせるのは証拠が残る危険性があり、断念せざるを得ない。代わりにむちっとした太腿に手を伸ばす。

運動を頑張っていることもあって弾力のある太腿だ。チンポを擦りつけるも生意気に弾く。

「生意気な女だな」

マーキングするように我慢汁を擦りつけ、刷り込んでいく。汗の匂いに混じる生臭さ。百合子を汚していく暗い喜びが彼の行動に拍車をかける。

彼女を横にさせ、背後からお尻を掴む。これもぶりっとして弾けるような弾力のある生意気なお尻。割れ目を開くと濃い色素の集中線。百合子もここから糞をひりだしているのだと思い、嗤えてくる。

「くくく、言い恰好だな。普段は先生のこと毛嫌いしているくせに、尻の穴まで見せて……。百合子はちゃんとお尻ふいてるか？ どれ、パンツを見せる……。ああ、ちゃんと吹いてないな。しようがない、先生が吹いてあげるぞ。この特製チンポでな……。」  
太ももの間にチンポを挟み前後させる。



彼女の汗と我慢汁が混じり、にゅじゅるにゅじゅると前後した。

どろっと先っぽから我慢汁が溢れる。無理やりのスマタでも思った以上に興奮する。

普段から我儘で傲慢な身体付きだと思っていた。少し前に読者モデルとして出たという話を聞いたが、その雑誌はバックナンバーを取り寄せ、最近まで週一回のローテーションに入っていた。今は滲んでしわくちやになったので、もう一冊買おうか迷っていた。

そんな惨めな行為も今こうして背後から抱きしめ、チンポを押し付けることで払拭できる。胸を揉みしごき、チンポを割れ目に擦りつける。このまま無理やり入れてやりたい気持ちもある。どうせ百合子の事だ。セックスぐらい経験あるのだろう。こんな生意気なおっぱいをしているのだ。男が放っておくはずがない。

「くそ、やりまくりやがってるくせに……、うっ……くう……」

お尻、太腿を抑えてチンポを圧迫する。そこを前後させると我慢汁がびゅっびゅと搾り取られてしまう。

さらにぬめりが良くなった百合子の股座。彼女の生えそろった陰毛はじよりじよりと音を立てていた。

「なんだ、だめじゃないか？ 陰毛は水泳の邪魔だぞ。ちゃんと剃らないと。今度先生が剃ってあげようか？ なあに、遠慮することはないぞ。百合子の割れ目は不細工だけど、先生ちゃんとかくんにしてやるぞ」

割れ目を弄り、クリトリスを暴く。

「……んっ……」

すると寝ているはずの百合子が呻く。

「……！！」

まさか起きたのかとしばし固まる。だが、彼女はそれだけでまた静かな呼吸に戻る。

「脅かすな……」

だが薬の効果も過信は禁物。驚いたことで少し萎えたチンポをいきり立たせ、きつさと満足を得ようと再び彼女の身体に覆い被さる。

本当は入れてしまいたいのが、妊娠が怖い。仕方なく割れ目にあてがって手で抜くこと数分。すぐに射精感が訪れる。最期ぐらいは百合子の手でチンポを握らせギョツと抜く。包茎の皮をぬむぬむ扱かせ、もどかしい快感をしばし味わうとどぶつと欲望を吐きだした。

包茎な勝行のチンポは精子の勢いも弱く、どろどろと太腿を汚した。

「ああ、くう……ああ……きもちいいぞ、百合子……」

びくんびくんと身体を震わせながら精子を絞り出す。

「はあはあ……」

まだ興奮冷めやらぬ勝行は精子の残るチンポを開いたままの彼女の口にあてがう。

「んう……」

無理に押し込むときゅっと口が締まる。舌先に精子を擦りつけ、おしっこをするように腰を緊張させた。

どびゅっと最期の精子が零れたようで、チンポを抜くと白い糸、塊が唇に着いた。「ふう、気持ち良かったぞ、佐々木。また今度、保健の勉強しような」  
精子で汚れた百合子の顔、太腿、股間の写真を撮ると、名残惜しそうにティッシュで拭う。最近は温かくなってきているから多少なら乾きやすい。

多少の不安を抱きながら、勝行は彼女を宿直しつへと運び、空調を入れて外に出た。

十

「んっ……あれ？ あたし……」

宿直室で目覚めた百合子は、痛む節々に訝りながら背伸びをする。

「お、起きたか？ なんだ、急に寝たからびっくりしたぞ？ 佐々木、疲れがたまっていたのか？」

奥の部屋から勝行がやってきた声を掛けてきた。

記憶の断片を探ると、ジュースを飲んだ後、疲れがどっと押し寄せて眠ってしまった。

身体が痛むのは、変な姿勢で寝ていたのが原因だろう。だが、口周りの臭いは何が原因だろうか？

「あの、もう帰りますんで。失礼しました……」

「お、そうか？ 送るぞ？」

「いえ、大丈夫です。お気遣いなしに……」

百合子は彼から臭う生臭さと、自分の口腔周りからする臭いに眉を顰める。

軽く礼をして急いで職員用玄関を目指す百合子。

口の中でひっかかる粘つきと、奥に挟まった魚の骨のようなものを舌で探り、手に取る。

それは縮れた毛であり、自分のよりもずっと長かった。

百合子は口をもごもごさせた後、水場に駆け寄りべつと唾を吐く。何度も嗽をし、何度も吐き出し、何度も嗽をし、何度も吐き出し……。